

# 人文会ニュース

1988.10

- 思想としてのメディア……………三浦雅士 1
- 人文会との13年とこれから  
……………(株)リブロ 小川道明 17
- リブロ・人文会研修報告  
……………弘報委員会 21
- 人文会創立20周年記念出版  
『人文科学の現在』出版に際して  
……20周年記念委員長 濱地正憲 24

52

業務用



# 悪党的思考 中沢新一

後醍醐天皇と南北朝期に示される日本史上の大転換は、現代の(知)にとっていかなる意味をもつか。権力空間の質、認識論的な構造、神の觀念、経済学的レベルの変化をしながらとらえて、ダイナミックに語る。

●定価1,600円

**平凡社**

東京都千代田区三番町5  
千102/振替・東京8-29639  
TEL 03 (265) 0455

●最近の女子大生のこころがわかる本

# ごきげんよう お嬢さん

水野綾子著 1200円

学習院大学でフランス語を講ずる若き著者が、現代の女子大生の生感をあたかも、目で観察した話題の書。



**日本評論社**

豊島区南大塚3-10-10/☎987-8621

## 法政大学出版局

### 煉獄の誕生

ル・ゴッフ 中世西欧世界における浄罪機能  
思想・煉獄信仰の形成と展開・その歴史  
を歴史的・文化的に探る。渡辺香根夫・内田洋昭/5800円

### 知識人の終焉

リオータル 高度情報化社会における知識人の普遍的理念の神話の崩壊現象及びその実験的試みにホスト七ツタンの可能性を探る。原田佳彦・清水正昭/1400円

### ユートピアへの勇気

ピヒト 理性の哲学的・歴史的考察を遁して科学技術文明をめぐる未来学的予言の眞理性を批判し、「理性のユートピア」実現の条件を探る。河井徳治郎/1900円

### 資本論と現代資本主義 II

カトラー/他 経済情勢の裏面的分析のために『資本論』の根本的批判を企てる。本書はマルクス信用論の諸論点を再検討。岡崎次郎・塩谷安夫・蔦永淑郎/3500円

東京都千代田区富士見2/☎03-237-1731

安岡正篤著

# 東洋宰相学

四六判/一五〇〇円

東洋史上の各種各様の政治家をとり上げ、その人間観・政治観を明かし、指導者のあるべき姿を探る。

千々岩英彰著

# 「色型人間」の研究

四六判/一八〇〇円

色の流行に敏感に反応し、色物商品を多用する現代の若者たち(色型人間たち)の心理と行動に鋭く迫る。なぜこの色だと売れるか―そのヒントがある。

東京・文京 小石川1-3 **福村出版** 電話(03) 813-3981

# 思想としてのメデイア

三浦雅士

橋川文三に「高山樗牛」という文章がある。なかに樗牛の美弟・斎藤野の人の手になる追悼文「亡兄高山樗牛」の一節が引いてあって頗る興味を覚えた。樗牛は明治三十五年没、野の人の文章は明治四十年、橋川文三の文章は昭和三十七年のものである。少し長いが孫引きしてみ

る。

樗牛の終る年の秋、鎌倉に居った時分にある時一人のお婆さんが訪ねて来た。是非樗牛先生に遇ひたいと云ふ……さうして云ふのには何も知らぬ者であるが私

の子息が常に此の本を読んで居るので、何気なしに其傍で聞いて居ると（筆者注Ⅱ当時はまだ音読の習慣がのこっていた）何となし心にしみる感じて非常に動かされたので、一体何人の作った本であると子息に問ふとこれはかく／＼の人の作である。併しこの人は今病気で鎌倉に養生して居ると聞いたので、俄かに憐れみを覚え悲しくなつて、そんな方ならば是非病を助けて上げねばならぬ、自分も嘗て大病であったがある呪なひにて直つたから、此の呪ひを是非高山先生に告げねばならぬと云つて、子息の止めるのも聞かず、博文

館からやっと先生の住所を聞き糺して今朝下谷からわざわざ参ったのであると半ば涙ながらに語ったのであった。而してお婆さんの尤も感じたと言ふのは『我袖の記』と『姉崎嘲風に與ふる書』の一部であつたとの事。

樗牛の名を知らぬものはないが、いまではその書を読むものはない。だが、かつてはそうではなかった。橋川文三は、樗牛の文章がかつては「文字どおり一世の青年を魅惑し、庶民的な一般性さえもつたことがあつた」ことを例証するために、右の一節をその樗牛論冒頭に引いたわけである。橋川文三はさらに、近松秋江の「故高山樗牛に対する吾が初恋」の一節を引き、戸川秋骨の、また正宗白鳥の言葉を引いて、樗牛の明治大正文壇への影響力の大きさを強調している。

確かに、高山樗牛全集全五巻は、明治末から大正はじめにかけては、青年の聖典といつてよいほどのものであつた。たとえば安倍能成は、明治十六年生まれだが、その青年期においては透谷以上に樗牛の存在が大きかつたことをしばしば書きしるしている。

だが、むろんここで樗牛論を展開しようというのでは

ない。斎藤野の人の文章をわざわざ橋川文三の樗牛論から引用したのは、「当時はまだ音読の習慣が残つていた」という橋川文三の注記に目を留めてほしかったからである。

「当時はまだ音読の習慣のこつていた」とはどういうことか。いうまでもなく、かつては読書といえは音読にはかならなかつたということである。それが樗牛の活躍した頃、すなわち明治二十年代から三十年代にかけて、黙読へと移行したということだ。むろん厳密な一線を引くことなどできないだろう。だが、少なくとも明治年間に、それまでは一般的であつた音読が黙読へと移行したことは明らかである。

樗牛が明治三十年代のスターならば、透谷は明治二十年代のスターである。島崎藤村は、透谷を中心とする「文学界」派の青年群像を、自伝的作品『桜の実の熟する時』、『春』のなかに刻明に描き込んでいるが、たとえば『春』のなかにには次のような一節がある。

会心の文章を読んで友達に聞かせるのは市川の得意である。その日も菅の机の上にある新刊の雑誌を開け

て見て、癖のように身体を動かしながら読出した。それは青木が女友を悼んだ詞の一節である。「二世という縁に二世あるは少く、三世というに三世あるも亦少し」市川は朗吟するような、澄んだ調子で、面白そうなどころを拾って読んだ。

市川は平田禿木、昔は戸川秋骨、青木は北村透谷ということになっている。引用は、透谷の『哀詞序』の一節。ここでは、読むことはそのまま音読することなのである。市川すなわち平田禿木だけではない。透谷もまた朗読を好んだ。同じく『春』のなかに、次のような件がある。

青木は自分で自分のにおいを嗅いで見るように、主人公が独白の一節を読んだ。二人の友達は耳を傾けた。「伸びたわ、伸びたわ、われながら剛々しきこの黒髪。二月ばかりも看経を断ち、香を焼かず、戒も守らず、この髪の毛ほどに吾心の中も黒々と、迷執の奴となるぞ口惜しき——」

昔も、岸本も、この新作の文句を聞いて、ある歴史上の人物を胸に浮べることが出来なかった。ただ紙の

上に描かれた青木自身の幻影をみるような気がした。

透谷が読んでいるのは戯曲『悪夢』の一節。岸本はいうまでもなく藤村自身である。明治二十年代においては、自身の作であれ他人の作であれ、人はしばしば音読して自身にも他人にも聞かせていたのである。

その音読の習慣がいつしか失われたということはどういうことか。いうまでもなく、読書というものの質が変わったということだ。この質の変化を示す良い例はたとえば藤村の『春』そのものである。朗読を好んだ明治二十年代の青年群像を描いた長篇小説『春』は、しかし必ずしも朗読にふさわしいものではなかった。朗読の情景を描いていること自体が、朗読にふさわしいものではないことを示していると、逆説的に述べられることもできよう。むろん、変化は幕末から明治にかけて徐々に起つたのである。音読から黙読への変化が、近代小説の文体にどのような影響を与えたか、たとえば前田愛はその『近代読者の成立』のなかで詳細に論じている。坪内逍や二葉亭四迷の文体は、その変化の過程で成立したというのだが、しかし私には、明治十年代から二十年代にいたる

過程以上に、二十年代から三十年代、さらに四十年代へといたる過程のほうがるかに重要に思われる。藤村の『春』は明治四十一年に刊行された。透谷の活動した二十年代から、藤村の『春』が刊行された四十年代のあいだに何か決定的な変化が訪れたのである。

藤村の『春』は、田山花袋の『蒲団』に触発されて執筆されたと一般にいわれている。『蒲団』、『春』という順に、いわゆる自然主義文学の流れがはじまるわけである。ところで、この『蒲団』が『春』以上に朗読にふさわしくないことはいうまでもない。有名な末尾の一節を引いてみる。

時雄は机の抽斗ひきだしを明けて見た。古い油の浮いたリボンが其の中に捨ててあった。時雄はそれを取って匂ひを嗅いだ。暫くして立上って襖ふすまを明けて見た。大きな柳行李が三箇細引きで送るばかりに絡かげてあって、其向うに、芳子が常に用ひて居た蒲団——萌黄唐草もへいからくさの敷蒲団と、綿の厚く入った同じ模様の夜着とが重ねられてあった。時雄はそれを引出した。女のなつかしい油の匂ひと汗のにはひとが言ひも知らず時雄の胸をとき

めかした。夜着の襟えりの天鷲てんじう絨じゆうの際立って汚れて居るのに顔を押し附けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂ひを嗅いだ。

性慾と悲哀と絶望とが忽ち時雄の胸を襲った。時雄は其の蒲団を敷き、夜着をかけ、冷めたい汚れた天鷲絨の襟に顔を埋めて泣いた。

薄暗い一室、戸外には風が吹ふ暴あれて居た。

私にはこれは、黙読を前提にしていたからこそ書きあげることができたと思えない。書き写して見てさえ気恥しくなるほどである。見てはいけないものを見てしまったような、聞いてはいけないことを聞いてしまったような、そういう困惑に似た思いに襲われてしまうのである。花袋自身がそれを意図していたのだ。花袋は自分の秘密を打ち明けた。打ち明けるには勇気を要するが、この勇気を要するという事実が、告白という行為の真実を保証しているのである。

ここには真実と秘密の微妙な連鎖があるが、この連鎖は、黙読という新しい伝統によってはじめて可能になった。おそらく、そう考えて誤りではないだろう。もしも

花袋の『蒲団』が自然主義文学の嚆矢であるとすれば、音読から黙読への変化こそが自然主義文学を生んだのである。

同じことは藤村の『春』についてもいえる。末尾の一章を引用してみる。

「ああ、自分のようなものでも、どうかして生きたい」  
こう思って、深い深い溜息を吐いた。玻璃窓の外には、灰色の空、濡れて光る草木、水煙、それからションボリと農家の軒下に立つ鴉の群などが映ったり消えたりした。人々は雨中の旅に倦んで、多く汽車の中で寝た。

復たザアと降って来た。

恥しさは「自分のようなものでも、どうかして生きたい」という内的独白を示す一行からやってくる。装われた真摯さの背後に、度しがたいナルシズムが感じられてしまうのである。声に出すには憚られる。これもまた黙読という伝統が成立してはじめて可能になった一行ではないか。もしも何らかの感動が立ちのぼってくるとすれば、読者もまた沈黙のうちに作者と同じナルシズムを共有した場合に限られるのではないか。

花袋、藤村の四十年代の仕事と対比すべく、透谷の二  
十年代の仕事を引いてみよう。たとえば有名な『厭世詩

## 誠信書房

### 臨床心理士に なるために

日本臨床心理士資格認定協会監修 今年度より新たにスタートする資格認定制度の意義と資格取得のための情報を提供する。 980円

### 個人的分析

ある精神分析医の情景  
前田重治著 精神分析医として臨床と研究の第一線て活躍してきた著者の興味深い自選エッセイ集。 1800円

### フロイトと後継者たち 〈上・下〉

P. ローゼン／岸田・富田・高橋訳 フロイトと彼をめぐる人びとの人間ドラマを大河小説のごとく描いた大著。(上)3800円・(下)3500円

### 対人社会心理学 重要研究集

(全5巻・別巻1)

齊藤 勇編 ①～⑤各2500円

- ① 社会的勢力と集団組織の心理
- ② 対人魅力と対人欲求の心理
- ③ 対人コミュニケーションの心理
- ④ 環境文化と社会化の心理
- ⑤ 対人知覚と社会的認知の心理
- ⑥ 用語解説・人名別研究一覧など

112 東京都文京区大塚3-20-6  
電話 946-5666(代表)

## 家と女性』の冒頭。

恋愛は人世の秘鑰ひやくなり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ、然るに尤も多く人世を覗のぞじ、尤も多く人世の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く恋愛に罪業を作るは、抑おさも如何なる理ぞ。

いうまでもなくここでは、黙読ではなく音読が前提となつていたのである。語られている内容はあるいは黙読にこそふさわしいかもしれない。だが、透谷は音読を前提としている。同じことは橋牛にもいえよう。とすれば、透谷も橋牛も、黙読を音読で表現したのである。音読によって黙読の富を暗示したのである。あるいはこれを音読から黙読への過渡的な段階と見做すことができるかもしれない。とすれば、透谷の内部生命論にせよ橋牛の美的生命論にせよ、音読によって黙読の富を表現しようとする過程で胚胎された理念であると考えられることもできよう。少くとも、幕末から明治にかけて生じた読書の質の変化に何らかのかたちで対応する理念であるとはいえる

のではないか。

明治文学のおさらいをしようとしているのではない。同じ本を読むのでも音読と黙読とでは大きな違いがある。メディアが違ふといつてよいほどだ。一方では口と耳が重要な役割を果たすが、他方では眼が重要な役割を果たす。本といえはひとつのメディアだが、その用いられ方によって異つたメディアとして機能するといつてよい。

音読から黙読への変化は、したがってメディアの変化である。問題はこのメディアの変化が、制作される作品の内容をまで決定しかねないということなのである。思想内容をまで決定しかねない。たとえば、明治浪漫主義の成立から自然主義の勃興までを、このようなメディアの変化に付随する出来事として記述することも不可能ではないのではないか。そう示唆したいのである。

\*

かねてから不思議に思っていたことのひとつに、幕末から明治にかけての青年たちがいとまたやすく外国語を修得してゆくように見えるのに較べて、明治、大正、昭和の青年たちの多くがつねに外国語不得手をかこつてい

るように見えるのはなぜかということがある。

たとえば藤村の『桜の実の熟する時』に、主人公の捨吉が居候先の小父さんの店に手伝いに出る場面がある。横浜伊勢崎町の雑貨屋である。ある日その雑貨屋に外人客が現われる。早速、捨吉の外国語修得の成果が問われるわけだが、外国人との会話をどうにかこなした後に、次の一行が付け加えられている。

学校の方で習い覚えたことが飛んだところで役にたった。尤も、捨吉のは、読むだけで、こうした日常の会話に成るとまごついてしまうという不思議な英語であったが。

これをたとえば『福翁自伝』の英語を習いはじめた件に較べてみる。福沢諭吉は江戸へ出た翌年、自分の語学の力を試してみるべく横浜へ出かけるが、そこでオランダ語がほとんど伝わらないことに気付いて深く落胆する。だが、落胆している場合ではない。そう思いなおした諭吉は、おそらく横浜の外国人たちが話しているのは英語だろうと見当をつけ、英語を習いはじめるのである。

英学が一番六かしいというのは発音で、私共は何もその意味を学ぼうというのではない、ただスペルリングを学ぶのであるから、子供でも宜ければ漂流人でも構わぬ、そういう者を捜し回っては学んでいました。始めはまず英文を蘭文に翻訳することを試み、一字々々字を引いて、ソレを蘭文に書き直せば、ちゃんと蘭文になって、文章の意味を取ることに苦勞はない。ただその英文の語音を正しくするのに苦しんだが、これも次第に緒が開けて来ればそれほどの難波でもなし、詰まるところは最初私共が蘭学を捨てて英学に移ろうとするときに、真実に蘭学を捨ててしまい、数年勉強の結果を空うして生涯二度の艱難辛苦と思いは大間違いの話で、實際を覗れば蘭といひ英といひも等しく横文にして、その文法も略相同じければ、蘭書読む力はおのずから英書にも適用して、決して無益でない。水を泳ぐと木に登ると全く別のように考えたのは、一時の迷いであつたということを発明しました。

良い例はほかに数多くあるだろう。だが、手近にあつたこの二つの例を一読対比してみるだけでも、諭吉の世

代の外国語修得法と藤村の世代のそれとでは大きく違っているのがわかる。諭吉のほうが声を出して読むこと、話すこと、発音することに心血を注いでいるのに較べて、藤村のほうはただ読むこと、それもおそらくは黙読すること、能事終われりとしているように見えるのである。むろん、藤村といえども英会話上達を無益と思っていたわけではないだろう。だが、「読むだけで、こうした日常の会話に成るとまごついてしまうという不思議な英語」が全否定されているわけではない。そういう英語もあっていいと考えているような節さえある。

いうまでもなく、藤村以後、日本人の習う英語は、それこそ「読むだけで、会話に成るとまごついてしまうという不思議な英語」へと変化していったのである。英語だけではない。フランス語にしてもドイツ語にしても、事情は似たようなものだろう。そのことは、たとえば著名な外国文学者の多くが、すぐれた翻訳者でありかつ解釈者ではあっても、必ずしもすぐれた会話者ではないという事実、端的に示されている。

私には、これもまた、音読から黙読への移行のひとつの帰結ではないかと思われるのである。

諭吉たちの世代までは漢文素読の伝統が生きていた。意味を知ることとはとにかく、与えられた文章を声に出して読むことが、あらゆる学習の基本と考えられていたわけである。たとえば貝原益軒の『和俗童子訓』に次の一節がある。

凡そ書をよむには、いそがはしく、はやくよむべからず。ゆるやかにこれを読み、字々句々、分明なるべし、一字をも誤るべからず。必ず心<sup>いたり</sup>到、眼<sup>いたり</sup>到、口<sup>いた</sup>到るべし。この三到の中、心<sup>いた</sup>を先とす。心、ここにあらざれば、見れどもみえず、心<sup>いた</sup>いたらずして、みだりに口によめども、おぼえず。又、俄かに、しるて暗<sup>くら</sup>によみおぼえても、久しきを歴<sup>よ</sup>ればわする。只、心をとめて、多く遍<sup>へん</sup>数を誦<sup>じゆ</sup>すれば、自然に覚えて、久しく忘れず。遍<sup>へん</sup>数を計<sup>か</sup>へて、熟読すべし。一書熟して後、又一書をよむべし。

誦<sup>じゆ</sup>すればとはまさに音読をすればの意である。何度も何度も声に出して読めば、自然に記憶して長く忘れることがないというのである。江戸時代を通してこの教訓が

生きていたことは、多くの文献から明らかである。いや、蘇峰、鷗外、漱石といった世代にいたるまで、この教訓、この伝統は生きていたといつてよい。

漢文素読は簡単にいえば外国語の音読である。それがいかに日本風の読み方になっていたとしても外国語に変わりはない。注意すべきは、この外国語修得にあたっては、意味を云々する以前にまず暗記することが要求されていたということだ。音読は、あえていえば、外国語を能率良く暗記するためのひとつの手段としてあったのである。漢文素読というかたちで持続してきたこの外国語修得法は、英語やドイツ語といった外国語を修得する際にもおそらく大きな力を発揮したのではないか。私には、幕末から明治にかけての青年が一度外国語を習いはじめるやいなやほとんどたちどころに上達していった背景にはこのような伝統が潜んでいたように思えるのである。いつてみれば、中学一年から三年にかけての英語教科書の文例のすべてを、発音もろとも暗記してしまうようなものだ。経験に照らしてみても、これがもっとも効果的な外国語修得法であることは明らかである。

明治から大正にかけて失われたのはこの伝統にはかな

らなかつた。浪漫主義から自然主義、そして私小説へといたる文学の流れは、この伝統の喪失と踵を接していたように思われる。藤村が自身の「不思議な英語」に少しも悪びれるところがなかつたのは当然なのだ。型を模倣し暗記することによって芸を会得することは外面から入ることである。内面こそが重要であるとすれば、それはむしろ排斥されるべきことなのだ。音読から黙読への移行は、内面重視への移行であり、それはやがて伝統的なあらゆる型の放棄へと移行していった。他者を説得するよりは、他者には通じそうもない自身の感情を大切にする伝統、たとえば私小説の伝統などは、こうして形成されていったと述べて誤りではないだろう。

むろん、四迷にせよ透谷にせよ漱石にせよ、その危機意識は、日本の近代が西洋のたんなる外面的な模倣にとどまるのではないかという危惧の念から発していた。三者三様の内面重視は、したがって当然すぎるほど当然といつてよいのだが、内面にせよ外面にせよ逆説的といふほかない概念なのである。一般に外面は内面によってかたちづくられると考えられがちだが、人格形成の過程を仔細に検討するとむしろ逆であることがわかる。たとえ

ば人間らしさはまず表情によってもたらされるが、この表情自体が自然にではなく文化に、すなわち模倣に属しているのだ。また、内面とは結局は信念の問題にほかならないが、信念の核心に位置するのはむしろ外部から与えられたものなのである。

内的必然性とは後になって見出されるほかないものである。誰もが原因があつて結果があると考える。だが、こと人間に関するかぎり、原因はつねに結果から推測されるほかないものなのだ。人は来し方を振り返つてなぜと問う。結果から原因を問うのである。だが、個人であれ社会であれ、歴史を繰り返すことはできない。ということすなわち、歴史には絶対的な原因など本来ありえないということである。それは解釈の領域に属しているのだ。現状の否認は現状の解釈を要請するが、一義的な解釈などありえない。こうして、多様な解釈の可能性、つまりは解釈の自由が逆に人を苦しめる。これこそ内的必然性を見出そうとして見出しえないという苦悩にはかならないが、この苦悩自体がじつは外部に、すなわち西洋近代に属しているというべきなのである。日本の開化が外発的であつて内発的ではないという苦悩そのものが、

また外発的なものなのだ。

外面と内面のこのような関係は、ほぼ正確に音読と黙読の関係に対応しているといつてよい。音読できずに黙読することはできない。この単純な事実が子供の成長を見守るだけですぐに理解することができる。だが、一度音読することを覚え、さらに黙読することを覚えたものにとつては、それがまるで逆であるように思えてくる。すなわち、黙読できずに音読することはできないように思えてくるのである。確かに、人はまず眼で読み、しかるのちに発音する。こうして、黙読が原因で音読が結果であるようにいつの間にか思い込んでしまうのである。黙読は内であり、音読は外である。まさに内から外へだ。だが、眼で読むという行為は、耳で聞き、指でさし、口で発音するという行為によつてはじめて可能になったのである。内から外へという回路の前に、外から内へという回路があつたのだ。内面性は、この外から内へという回路を忘れ去ることによつて成立するといつてよい。音読から黙読への移行もまた同じような忘却に裏打ちされているのである。

人はやがて、声を出して読書することを恥じるように

なる。それは忘れられるべき幼稚な行為、野蛮な行為にほかならないのだ。こうして、ついには、図書館の静謐が人間の精神のすべての領域を覆うようになるのである。静謐こそ内面の象徴になるのだ。

\*

このように見てくると、音読から黙読への移行という些細とも思える変化が、些細どころかきわめて重大な変化であったことがわかる。この変化は具体的にはいったい何によってもたらされたのか。思い浮かぶ第一の理由は、いうまでもなく書物をはじめとする印刷物の量がいちじるしく増大したことである。そして第二の理由は、初等教育の浸透によって識字率が上昇したことである。

音読の効用は記憶の助長にあるだけではない。むしろ外からこれを見れば、効用の第一は字を知らないものを読んで聞かせることができるところにあるようにさえ見えるのである。識字率の向上がこの効用を不要にしたことはいままでもない。さらに、印刷物の量の増大は、益軒の教訓を真向から否定することになった。人はいまや「いそがはしく、はやくよむ」ことを強いられるように

なったのである。黙読は音読より速い。情報量の増大が、音読から黙読への移行を加速させたことは明らかである。印刷物の量の増大も、識字率の上昇も、明治になってはじめて煮き起こされたわけではむろんない。いづれも江戸時代を通して一貫して増大し、上昇してきたと想像することができる。だが、活版印刷の一般への浸透にしても初等教育就学率の上昇にしても、明治なかばから末期にかけてはじめて顕著になってきたのである。

音読から黙読への移行の背後に、印刷革命が潜み、教育革命が潜んでいたことはまぎれもない。

アナル学派の歴史家ならば、当然ここで具体的な統計数値を出すべき段取りである。リュシアン・フェーヴルとアンリ・ジャン・マルタンの『書物の出現』（筑摩書房）や、エリザベス・アイゼンステインの『印刷革命』（みすず書房）、さらに、いささか趣味的だがヘルムート・プレッサーの『書物の本』（法政大学出版局）などに言及しながら、印刷物の未曾有の増大が、文化全般はもとより思想や芸術の内容をまでいかに変えていったか、綿密に跡づけてゆくといった操作が要請されるというわけである。

たとえばアイゼンステインは、印刷革命による書物量の増大が、モンテーニュやデカルトに懐疑という方法を編み出させたのだとほめかしている。「かつての学者たちが一生を旅から旅へとついでついでしてようやく目を通すことができた書物の数よりずっと多くのものを、モンテーニュはその塔にある書齋に居ながらにして数カ月で読破できたという事実」はきわめて重大だというのである。「彼以前の中世の注釈者に比べ、モンテーニュが自分の目を通した本の中に『矛盾と相違点』をより多く見いだしたのはなぜなのか。それを考えるには、彼が入手できた書物の数の多さに一言しなければならぬ」。書物の量は思想の質を変えろというわけだ。アイゼンステインはさらに次のように述べている。

豊富な書物は古い学説に対する信頼を弱めるばかりでなく、新しい知識の統合置換をも促した。アーサー・ケストラーが示唆したように知的統合活動は多くの創造行為を生む。種々の古典が一つの書齋に集まれば、各種の思想体系や特定分野の結合は起こりうることだった。つまり比較的安定した市場に対するアウトプット

の増加は、第一に古い思想の新たな統合、続いてはまったく新しい思想体系の誕生を呼ぶにふさわしい状況をつくりだしたのである。(別宮貞徳ほか訳)

興味深い指摘である。同じようなことは、ヨーロッパのみならず日本においても成立したのではないかと、おそらく誰もが考えるだろう。幕末から明治にかけても同じようなことがいえるのではないか。あるいは、やはり書物量のいちじるしい増大を見たという江戸時代初期においても同じようなことがいえるのではないか。

西鶴、近松、芭蕉を論ずるに、まず京都を中心にした出版革命から説きはじめるのは、いまでは文学史家のほとんど常套になっている。洒落本、滑稽本、人情本にしても同じだ。文化文政の江戸には六百軒以上の貸本屋があったという。たとえば今田洋三は『江戸の本屋さん』の冒頭に、「出版業は、日本では江戸時代のはじめに成立した、生産・流通過程における全く新しい部門である。それまでは、印刷という文化の現象はあっても、営利事業ではなかったから出版とはいえないものであった」と書きしるし、さらに次のように述べている。

江戸時代に成立した出版業は、これまで写本として蓄積されてきた、古代以来の日本人の精神活動の所産のうち、目ぼしいものを全部、出版物に替えてしまった。「源氏物語」を自分の部屋に備えておくなどということは、ほとんどできなかった一般の人々まで、そのコピーを手に入れることができるようになった。貴族社会の古典が、日本民族の古典に性格をかえはじめてきたのである。古典の解放といってもよい。中国の古典もまた印刷出版せられて、一般に解放された。誰でもが、その意思があれば古典に接しうることになって、文化享受のかつてない身分的・地域的拡大がすすんだのである。

十七世紀日本の、出版文化の成立と発展の中心地は、京都であった。出版業を庶民の生業として成立せしめたものは、室町・戦国以来の町衆の文化的・経済的能力であった。

十七世紀の京都に出現した「豊富な書物」もまた、それでは「古い学説に対する信頼を弱め」、「新しい知識の統合置換をも促した」のだろうか。おそらくはそうなの

だ。人は誰でもここで伊藤仁斎や東涯、荻生徂徠の名を思い浮かべることができるだろう。古義学も古文辞学も、当時の「古い学説」である朱子学への不信にはかならず、「新しい思想体系」構築への模索にはかならなかったのである。

ちなみに、中村幸彦の「古義堂の小説家達」をはじめとする論考は、元禄期から享保期にかけての学界の変化の背景にこのような出版革命が潜んでいたことを示唆している。

おそらく、ほぼ同じようなことがより広く深く、幕末から明治、さらに明治末にかけて起こったと考えることができる。音読から黙読への移行はこの変化に伴うひとつの現象にすぎないが、この過渡期を象徴するメディアの形態があったことを最後に指摘しておきたい。それは、いわゆる総ルビといわれる形態である。

\*

普通、字が読めないからルビを振ると考えられている。だがほうとうにそうだろうか。

其粧服おいでたへいかにといふに。此日このひハ日曜日にちようびの事ことにてもあり。且ハ櫻見さくらみの事ことなるから。貯たくはへの晴衣装はれいしやうを。着用ちやくようしたりと見ゆるものから。衣服こもでハ屑糸銘線くづいめいせんの薄綿入うすわたいれ。たしかに親父おやじからの被讓ゆずられもの。近日ちかごろ洗濯あらひをしたりと見え。襟肩えりたもまだ無汚きれいなり。

道の『当世書生氣質』の一節である。この例を見てなお、ルビは難しい字に振られるためにあるなどといえるだろうか。確かにルビは読み方、すなわち音読の仕方を指示している。だが、その読み方はいえ、決して字の一般的な読み方に対応しているわけではないのである。粧服を「いでたち」と読ませ、衣服を「こそで」と読ませる。近日は「ちかごろ」であり、無汚は「きれい」である。まさに、視覚と聴覚という二重のチャンネルを駆使したエクリチュールというべきだ。ルビは音に奉仕し、文字は意味に奉仕している。いいかえれば、ルビは音読のために、文字は黙読のために与えられているのである。そこには遊戯的な要素さえ感じられるが、遊びを樂しむことができるのは、黙読を覚えたものに限られる。総ルビは、明らかに音読から黙読への移行を象徴する形

態なのである。

道 だけではない。紅葉にしても同じだ。『三人妻』の冒頭を引いてみる。

あるやうで無いものを金銭かねとて、天下てんかの人の寢言ねごにまでいうて欲ほしがらざるはなし。信まことに此金銭このかねの獲難えがたきことの不思議ふしぎさは、鉄てつを吸すふには奇妙きめう、磁石じしやくといふ神通力つうりきあるに、此これは何なにしたものと、金時計買きんどけいかふ人の後あとに、過難すまがてに立てる納豆売なちどうりの獨語道理つばやまごともの至いたりなり。

獨語道理が「つぶやきもつとも」とはまさに恐れているほかない。高尚な遊びとでもいうべきところだろうが、それはただ音読から黙読へと移行する過渡期においてのみ可能だったのである。

総ルビはいつからはじまったか。

ルビはルビ活字すなわち七号活字のこと。小さいのでルビと称されたのである。そこで活版印刷とともににはじまったように考えられがちだが、そうではない。振仮名を活字にただけだ。そして振仮名とはいえば、たとえば式亭三馬の『浮世風呂』の地の文に「此女かたこと

ばかりならべるゆゑよく／＼ふりかなに気をつけてよみ給ふべし」(二編巻之下)とあるように、江戸の昔からある。三馬の地の文は振仮名が音読の便に供されていることを示していて、一寸見には遊びのためとは思えない。だが、滑稽本をさらに洒落本へと廻って考えれば違うことはすぐにわかる。洒落本とは、水野稔の説によれば「儒者・文人としての知識・教養ある人々が匿名で、特定の遊里の遊女の名寄せ細見風のものに添えて、卑俗な廊中の情景や習俗を、しかつめらしい漢文に戯れのよみがなをつけたような戯文で描いた小形の書物」(日本古典文学全集47総説)である。この「しかつめらしい漢文に戯れのよみがな」の組み合わせが、すなわち総ルビの

起源というべきだろう。ここでは振仮名はたんに読みを示すためにあるのではない。遊びのために無くてはならないものとしてあるのである。それがたまたま無学なものにも読めるかたちになっていたにすぎない。振仮名の役割は二重であって、しかも入り組んでいる。ここにも原因と結果の微妙な転倒が見出されるといってよい。

この伝統は根強く、人情本にいたるまで変わらない。「艶言で欺て浮薄で交て、甘口をうれど貞烈真操、堅き誓ひも和らかき、色気を保し榮躰談子、実に此妓は美女といふべし」とは、『春色梅兒譽美』冒頭の米八の姿絵に付された詞だが、為永春水は同じ趣向を『英対暖語』でも繰り返している。

人文会創立二十周年記念出版

# 人文科学の現在

人文書の潮流と基本文献

今、話題の人文科学におけるテーマ、現代思想(宇波彰)、時間・空間(村上陽一郎)、人間関係(齊藤勇)、女性(芹沢俊介)、老い(今村仁司)などについて、第一線で活躍する二十名が執筆。さらに人文科学分野別基本図書50点を収載。

A5判 三六頁 二二〇〇円

発行

人文会

東京都文京区本郷5-32-21

みすず書房内

電話 03-814-0131 〒113

……さて其橋（永代橋）の名に依て永く栄ゆる永代団子を、下戸の作者が甘口に、仮用て題号し英対暖語は、美言で丸て艶画で製本、上館の細かき真実、意気な妓を沢山添て、新嬢もつき出しに念を入る精製ゆへ、……（中略）遠国他国の看官に土産として風情が変らず、分解易くして胸につかへねば、児女童幼達のよみなれて、よろしく勸善懲惡の一助ならんと云爾。

ここでは逆に「戯れのよみがなにかつめらしい漢文」を付けたような風情で、当時の「児女童幼達」の鑑賞力にいささか恐れるほどだが、いづれにせよ、洒落本の伝統が滑稽本、人情本を通じて遣、紅葉にまで流れていることは歴然としている。江戸文学、明治文学などという呼称はやめて、十九世紀文学とでも称したほうがよいほどだ。漢字と仮名という二系列の文字は、高度に複雑な言葉遊びを可能にしたのである。

この遊びが、黙読の普及とともに消えていったことはいうまでもない。漢字の読みはやがて統一され多様性は抑圧された。黙読の普及は読みの逸脱を許さないことによつて可能になったのである。自然主義文学の真面目さ

は、新政府の真面目さと均り合いがとれていたというべきか。いまでは遣の作品も紅葉の作品もほとんど省られることがなくなつてしまった。急激なメディアの変化に振り落とされたといつて過言ではないだろう。

人はこれを遠く過ぎた明治の話として一笑に付すかも知れない。だが、メディアの変化ということではいまや昔日の談ではないのである。エレクトロニクスの驚異的な発達は、幕末から明治にかけてのそれ以上の変化を現代のメディアにもたらしつつあるのだ。メディアの変化は文学や思想にも変化を促さずにはおかない。新聞社も出版社もこの変化に対応すべく苦慮しているといつてよい。

変化の全貌は渦中にあるものには見えにくい。よほどの注意を払わないかぎり見えてはこないのである。

### 三浦雅士（みうら・まさし）

一九四六年青森県弘前市に生れる。著書に『私という現象』（冬樹社）、『主体の変容』（中央公論社）、『メラノコリーの水脈』（福武書店）、『夢の明るい鏡』（冬樹社）、『自分が死ぬということ』（筑摩書房）、『寺山修司』（新書館）、『死の視線』（福武書店）、『疑問の網状組織へ』（筑摩書房）などがある。

# 人文会との十三年とこれから

㈱リプロ 代表取締役  
社長

小川道明

池袋に西武ブックセンターが誕生して十三年が経過しました。或る意味ではアツという間、という感じですが、これから十三年経つと世紀が新しくなるのですから、また気を引き締めて頑ばらねばという心境です。

堤会長から池袋店三百坪の書籍売場を、という話があったのが一九七五年の五月半ばでした。当時西友ストアーの広報室長という職にあって、無事に株式上場という山場も越え、一息ついていたときでした。出版界をリタイアしてすでに十年余が過ぎ、まして編集畑にいても営業の経験がないのにこれは思わぬ大役です。さすがにすぐ

にはお引受けせず一週間の時間を頂き、「どんなもんだろうか？」とぶっちゃけた相談に行ったのが畏友の東京大学出版会石井和夫さんだったのです。池袋は芳林堂あり旭屋あり、それに三省堂・新栄堂とすでに東京一の激戦地で、百貨店の十一階に売場をつくってお客さんが上がってくるだろうか、というのが偽らざる心配でした。

石井さんとどれほど突っこんで話したか、はたまたマーケットの分析などしたか忘れましたが、池袋はまだ発展することに間違いないから一丁やってみるか、という結論に達したのです。ですから春秋の筆法を借りれば西武

ブックセンター誕生の産婆役はまさに人文会ということにもなるのでしよう。

それでも常備のお願いに出版社廻りをしたときはかなり皮肉をいわれました。さすがに人文会の版元にはそんな所はなかった、と記憶していますが、「池袋は他の大型書店で充足していますから」とか「百貨店の売場は駄目だとなると縮小したり消えたりあてにならないから」とやんわり拒否されたケースも何社ありました。しかし、人文会ブックフェアや地方・小出版社フェアなどが話題になって、西武の書籍販売に寄せる姿勢と熱意などを理解いただけるようになって、ようやく今日に至ったということでしょう。

三年前の六月に株式会社リプロということで西武ゼングループ内で独立の書籍販売専門会社として一本立ちしました。その契機はなんといっても顧客のニーズへの対応ということです。成熟時代になってお客様の商品に対する要求は質の高さを要求されます。それはサービスにおいても同様です。それに時間とか便宜性が生活のなかで重要なファクターになってきます。コンビニエンスストアが新しい流通チャンネルを開拓したのもまさにそ

れでしょう。百貨店や量販店のなかの書籍売場もたんに在ればよい大きければよいという時代ではなくなりました。専門書店として常に質の高さを求め新しいサービスを追求しなければ存在意義が薄れるということです。そのため西武百貨店や西友に「就社」した人でなく、リプロという本屋に「就職」したい人間を集め教育していくのが遠廻りのようで結局いちばん成果の挙がる道だということになりました。

「人文会ニュース」の第一五号に『西武ブックセンターに聞く』という二十二ページにおよぶ特集が載っています。七七年の一月に弘報委員会の石橋・安藤・八木さんにインタビューされたもので、七五年の九月にオープンして一年ほど経って、まあこれなら多少本気で取り組んでいる感じだなと社会的に認知して頂いた結果の企画だと思われる。それでも「いわゆる百貨店がおやりになったということについて、どういうおつもりだったのか？」なんてきついジャブのつけから飛び出してきました。いちばんご理解の深かった人文会ですらですから、他の大手版元の空気など推して知るべきだったと思り返しています。

リプロになって三年。店舗数で二十四を数えるようになりました。日経流通新聞の昭和六二年度の専門店ランキングが七月九日に発表されましたが書籍部門では一三四億円の売上げで四位にランクされていました。いまの成長度でいけば来年はもう一つランクアップすることになります。年商二百億円は確実に射程距離に入るところまで来て、ようやく「リプロってどこの本屋だ」といわれないようになったようです。

規模はともかく、どんな本屋を目指しているかについて触れないとなりません。お世辞でなく人文書ではどこにも負けない本屋を理想像としているのです。数年前に踊らされて商品構成に手を入れた書店もありました。しかしリプロの池袋店のように年商で五〇億円近い大型店では雑誌の売上げ比は六%くらいにしかありません。雑誌を一〇%伸ばしても全体への寄与は〇・六%、だから書籍の充実に努力しなければいけない、それが基本だと指導してきました。もちろん書籍にもいろいろのジャンルがあるわけですが、こと専門書でいえば人文書というのはスクランブル交差点の真中に位置するようなものだ

と思っています。学際の時代になってどこの書棚に分類するのかに困る本も多くなりました。医学書や理工書はまったくの専門ジャンルで横断歩道を直角に渡る感じですが、人文書というのはいわば魂の書であって、医学や理工バカなどにならないためにもマージナルな学問の追求は絶対に必要なことでしょう。人文書というのはあらゆる角度から人々が踏み渡ってくるという意味で交差点の真中だということです。

西武セゾングループは二年後に創業五十年を迎えます。そのため社史の編纂が進められています。歴代経営者の業績をヨイショするありきたりのものでなく、歴史は歴史として叙述するが、それを素材としてもとらえ縦横に切りきざんで二一世紀における消費社会像の解析、新しい社会論人間論の追求に挑戦しようとしています。そのため現代を歴史哲学的視野で省察し、人間行動のダイナミズムを未来的に分析している研究者などに参加を求めています。つまり過去の流通論やマーケティング論だけからはこれからの消費社会や人間像は生れてこないということです。いまほど学際的な学問の追求が必要な時代はないわけで、それほどに人間の心のヒダや行動は

複雑になっており、その意味で人文書は魂の書だと述べたのです。個有名詞としては、人文会に関係深い著者としては今村仁司、多木浩二、内田隆之、上野千鶴子、三浦雅士先生などに参加・協力をお願いしているようですが、企業グループとして人文科学への理解や位置づけがそうである以上、私どもとしても人文書への取組みはきびしくなり、棚づくりにも反映されるわけです。

それよりもなによりも冒頭に触れたようにあと十三年で二一世紀となります。チュエルノブイリの原発事故から二年経つてますます原発や核兵器の恐しさが実感されるようになりました。共存か破壊かのオルタナティブしかないのに国や人間の争いはいっそう醜く深くなっているようです。こんな時代に本当に必要なのは思想であり宗教であるでしょう。来たるべき世紀での本屋は人文書が一冊でも多く読まれるよう努力せねばと思っております。一方通行でなくスクランブル交差点の真中に人文書がデンと位置しているような書店づくりを目指しているのです。

〔弘報委員会より〕

○今年五月に、リプロ・ブックセンターさんと研修会を行いました（概要は、「研修会報告」をご覧ください）。講師をお引受いただきました三浦雅士氏には、ご講演のテーマとは別に、ユニークな視点からの「メディア論」を、（株）リプロ代表取締役社長小川道明氏には、リプロ・グループの略史と展望、そして人文書の位置づけを、御執筆いただきました。

○小会二〇周年記念出版『人文科学の現在——人文書の潮流と基本文献』は、人文書の多様な魅力を明らかにする話題の書でございますので、販売にご協力下されば幸いです。発売は、十一月初めを予定いたしております。

○五月より、各委員会のメンバーが交替いたしました。本号は、新委員会の第一号になりますので、ご意見等をお寄せ下さい。

# リブロ・人文会研修会報告

## 弘報委員会

本年五月十一・十二日の二日間箱根において、リブロ

ブックセンターさんのグループと研修会を行いました。

ご出席された店は、池袋店・船橋店・藤沢店・錦糸町店・

光ヶ丘店・前橋店・宇都宮店・塚新店、さらに本部・関

西事務所からもおいでいただき、合わせて十五名、人文

会のメンバーが二十二名、それに講師の三浦雅士氏を加

えて計三十八名という大所帯になりました。

〔書店さんとの研修会とは〕

研修会は今回で六回目になり、回を重ねるごとに、さ

まざまな成果が出ております。

人文会では、ご存じのように特約店制度を設定し、小

会にふさわしい方法はないものかと研究していますが、

そのひとつの存り方として書店さんとの研修会を行って

おります。内容は、版元の企画・営業活動に対する書店

さん側からの率直な批判、また版元から書店さんに対す

る要望、時には取次店さんも交えての三者それぞれの立

場からの事情説明等々。実際の活動を通しての話し合い

は、非常に有意義なものです。特に、棚構成については、

その難しさ故、有識者を招いてご講演いただき、その後



〈小雨降るなかの記念写真〉

の質疑で一層の実を挙げてまいりました。小会としては、研修会を通して書店の人文書担当の方々に、人文書に少しでも親しんでいただき、その結果として人文書の棚が充実し、そして売り上げが伸びることを期待しております。

〔研修会の概要〕

研修会は、第一日目の午後一時より始まり第二日目の午後四時に終了するというハードなものでした。

最初に、リブロ本部山西正夫氏より「リプログループの構想」と題してお話いただきました。昭和五十年九月西武百貨店池袋店の書籍売り場としてスタート、余暇時代の到来を先取りすることにより売り上げを伸ばし、五十四年秋には売り場を拡張し、大型店としての体制を築く。六十年六月には(株)リブロとして独立し、グループの拡張と充実に力を注ぐ。現在、リブロ直営店は二十四店、総面積三三〇〇坪、一番新しい出店は今年四月の水戸店になります。山西氏に続いて中村文孝氏(リブロ本部)より、リブロの現状(例えば、過大評価されているのではないか等)および人文書の枠組みの変化(水戸出

店に際し、従来の分類の枠にとられない多面的な棚構成を意図する）等について述べていただきました。

次に、池袋店今泉正光氏に人文書の各分野——心理・哲学思想・教育・歴史・宗教——について現状分析をお願いし、限られた時間の中でまとめて下さいました。

初日最後のプログラムとして、「宗教」「心理」「現代思想」の棚構成について、小会より三人の方々に熱弁をふるってもらいました。

懇親会の一次会は軽いジャブの応酬があり、二次会では談論風発・時間制限なしの体力勝負になりました。

なお、三浦氏には二日目に講演をお願いしていたにもかかわらず、初日よりご参加賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

第二日目の午前中は、リプログループと人文会を各三つの分科会に分け、トーナメント形式で討論を行いました。リプロの皆さんの平均年齢は二十代後半だと思いま

す。人文書の棚をどのように創っていけばよいのか、を真剣に考え努力されている姿が特に印象に残りました。

また、具体的な問題としては、情報（新刊案内・売れ行き動向等）の活用・新刊配本や常備の問題・各店の立地条件を考慮した販促（例えば、ブックフェアの立案・選書の仕方）、などさまざまな意見が提出されました。

午後は、三浦氏の講演です。今回の研修で取り上げられた多様な話題を踏まえながら、アメリカでの体験を取り入れた書店論や学問の相対化の動き、そして人文書の役割について二時間以上にわたり、楽しく且つ魅力溢れるお話をお伺いいたしました。

最後になりましたが、今回の研修会にご協力賜りました(株)リプロ小川道明社長、さまざまなお力添えをいただきました山西氏、そしてリプロ各店の皆様に、誌上を借りて、厚く御礼申し上げます。

## 人文会創立二〇周年記念

### 『人文科学の現在』出版に際して

人文会二〇周年記念委員会委員長 濱地 正憲

人文会はずぐれた人文書の普及と販売を目的として、昭和四三年に結成され今年で満二〇年となります。現在二一社の加盟があり、会の中には四つの委員会があります。その活動をみますと、以下のような事があります。調査・研修委員会では、特約店の書店様を訪問して、懇談会を行ったり、あるいは泊まり込みで新刊の販売、常備の問題、棚の活性化についてなどを討論しあう研修会があります。そしてこれらの特約店訪問記や研修レポートの掲載や書店・取次店の人に執筆いただいたりしている「人文会ニュース」の発行、会員社の新刊を月毎にまとめ、全国の大学図書館や公共図書館へ送付している「新刊月報」の作成などを担当している弘報委員会があります。さらに販売企画委員会では、新刊や主要在庫を集めた人文書六〇〇点フェア、在庫僅少本フェア、全集・シリーズ物のカタログセール、一年間の新刊一覧による大学・公

共図書館への巡回販売、会員社の売れ行き良好書をセットした人文科学特選図書店頭販売があります。

これらの事は、常日頃から書籍、特に専門書の販売に力を注いでいただいている数多くの書店様や取次店様の絶大なる協力により、できたことであり、できることであります。そして今の二〇周年があるのだと思います。この場をかりまして厚く御礼申し上げます。

二〇年といえますと人間でいえば成人式です。一つの節目として何かやろうということ。一つの節目として何かやろうということ。それが自然と会員社の中から出て来ました。それではということ。二〇周年記念委員会が設置された訳です。

前述の研修会や懇談会を行ってきた中で、専門書の売り方の難しさ特に人文書の売り方の難しさが、議題の中心になることがしばしばありました。それでは人文書販売の手引書となるべき何かができないものかと考えまし

たのが、今回の『人文科学の現在——人文書の潮流と基本文献』という人文会創立二〇周年記念の出版です。

本書は二部構成になっております。

第一部は現在話題になっているテーマ二〇本の小論文、例えば現代の思想状況、認知科学、人間関係、日常の中の歴史、育児・教育、女性、老いなどについて第一線で活躍されている先生方や編集者の方にご執筆いただき、そのテーマに添った文献をそれぞれ約一〇〇点選出していただきました。

第二部は人文科学分野の哲学・思想、心理、宗教、歴史、社会、教育を五〇分類してそれぞれ五〇点前後の基本図書を選び出しその数は二五〇〇点になります。

テーマ別論文、執筆者、そして基本文献の分類は別表のとおりです。論文のテーマ選びや執筆者への依頼は、人文会担当者だけでなく、会員社の編集の方々にも協力いただきま

第一部 テーマ別一覧

タイトル	執筆 者
危機の中の現代思想 ポスト・モダンの選択 時間・空間 プロト・モダニズムの言語学 コミュニケーション論の系譜 認知科学 深層心理学と文化的背景 人間関係の研究 △トランスパーソナルVの現在 歴史学における日常性の 研究動向とその意味	宇波 彰 小林康夫 村上陽一郎 竹内信夫 岡部朗一 伊藤一 枝 村本詔司 斎藤 勇 吉福伸逸 武光 誠
「中世史」の魅力 ワイマールと全体主義 園芸術から森林学まで 育児書の現状と書店の対応への提案 「教育」の棚への提案 女性・フェミニズム 女性・ジェンダー・N個性 老いと現代 情報論のための本棚 生物学からライフ・サイエンスへ	黒田日出男 亀嶋庸一 平川幸雄 毛利子来 斎藤次郎 伊田久美子 芹沢俊介 今村仁司 粉川哲夫 長野 敬

第二部 基本図書分類

大分類	中 分 類
哲学・思想	哲学 言語学 東洋思想 西洋思想 現代思想への案内 実存主義 マルクス主義 現象学 分析哲学・論理 実証主義 フランクフルト学派 芸術思想 政治思想 科学思想 記号論・意味論・解釈学 構造主義 ポスト構造主義 日本の現代思想
心 理	心理一般 基礎心理 発達心理・教育心理 臨床心理 精神分析・精神医学 社会心理 その他の心理
宗 教	宗教一般 仏教 キリスト教 その他の宗教 精神世界 ニューサイエンス 新宗教
歴 史	考古学 日本史 世界史 文化人類学 地域研究・文化史 神話 民俗
社 会	社会学 生活問題 社会問題 国際問題 日本論・日本人論 福祉 家族社会・女性論 マスコミ
教 育	教育論 教育学 家庭教育 教育問題

した。また第二部の基本図書の選出につきましては、東京の主要書店様に絶大なご協力をいただきました。分類につきましてはいろいろな分類法ができました。テーマでまとめる分類法がある、いや人でくくる分類法があるという意見が出ましたが、結局はオーソドックスな分類とした方が全国のより多くの書店様に役立つだろうということに落ち着きました。基本図書の基準につきましても、今後少なくとも三年から五年間売れ続けるであろうと思われる書籍、人文書の棚を構成するうえで核となると思われる書籍ということで選出させていただきました。現在流通しています人文科学書の約二万五〇〇〇点ないし三万点の中から一〇%のものを選ぶ訳ですから完全とはいえません。ただ、現在、論文にしろ、基本図書にしろ人文科学の棚を形成する上でひとつの指針となれば幸いと考えています。

人文会特約店・準特約店様には感謝の意を込めまして一部謹呈させていただきます。

本書はA五判三三三二頁、定価二〇〇〇円です。日頃から人文科学書に親しんでいただいています多くの読者や図書館にとりましてはガイドブックともいえるものです。販売をもよろしくお願い申し上げます。

# 人文会会員名簿

(〒113-91 東京都文京区本郷局私書函89号)

1988. 10. 現在

	社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
	青木書店	古川 清	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481	292-0475
	大月書店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	橋本 盛作	102	千代田区九段北1-8-2	230-2510	265-7767
	紀伊國屋書店出版部	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘5-38-1	439-0125	439-1094
	勁草書房	氏家 富男	112	文京区後楽2-23-15	814-6861	814-6854
	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷3-25-13		
				中銀本郷3丁目ビル	813-8105	813-9061
幹事	春秋社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611	253-1384
	晶文社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4501	255-4506
幹事	誠信書房	濱地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666	945-8880
幹事	創元社	重光 義彦	162	新宿区山吹町77	269-1051	269-1092
	筑摩書房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651	295-0220
会長	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	812-2111	
					内7955	
幹事	〃	竹内 康一		〃	811-8814	812-6958
幹事	日本評論社	後藤 光行	170	豊島区南大塚3-10-10	987-8621	987-8590
	福村出版	土屋知可夫	112	文京区小石川1-3-17	813-3981	818-2786
幹事	平凡社	須田 康昭	102	千代田区三番町5 Kビル	265-0455	263-9333
幹事	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見2-17-1		
				法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	みすず書房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131	818-6435
	未来社	西谷 能英	112	文京区小石川3-7-2	814-5521	814-8600
	雄山閣出版	武 一雄	162	新宿区白銀町20	266-8481	266-8444
	有斐閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811	262-8035
	吉川弘文館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151	812-3544

販売企画委員会 ◎竹内 ○氏家 西谷 辻村 川越

弘報委員会 ◎澤畑 ○土屋 古川 橋本 萬洲

調査・研修委員会 ◎市川 ○武 原田 渡辺

20周年記念委員会 ◎濱地 佐久間 菊池

◎印は委員長 ○印は副委員長

### ヒルマの花

戦場の父からの手紙

福田憲子 ヒルマの戦場で一人日系米兵に拾われた手紙に始まり、半世紀近い歲月の感動の人間記録。写真56 1600円

### ウィーコの懐疑

上村忠男 デカルトに始まるヨーロッパの諸学に異議を唱えたイタリヤの「異端者」の全容。学の起源への問い。1600円

### T.S.エリオット

アクロイド 『荒地』の詩人の生涯と作品を精査し、そのパ  
ラドックスと複雑さを解明した伝記。武谷紀久雄訳 1600円

### 経済人の西・東

上田辰之助著作集5(第3回)  
アダム・スミス研究 デイフォウと西鶴の比較研究、中国・  
インド・日本論等19篇。碩学による東西文化比較論。1600円

みすず書房

東京文京本郷  
3丁目17-15

### 万葉集研究入門ハンドブック

森淳司編

●2800円

### 俳句読本

実作者および純粋  
読者へのメッセージ

●1800円

### かわら版物語

江戸時代  
マスコミの歴史

●4800円

### 源氏物語とかな書道

駒井鶯静著

●4800円

### 万葉の花

桜井満著

●2800円

### 雄山閣

千代田区富士見2/振替東京3-1685

### ●粟津則雄著

## 眼とかたち

自らの精神形成の上で強い印象を与えられた  
美術史上の名作をたどりながら、美術と自己  
との交渉を語る。西洋近代絵画 中世、ルネッ  
サンス期の作品をはじめ日本の伝統絵画の系  
譜にいたるさまざまな作品を広く渉猟する。

●定価2500円

未来社

東京都文京区小石川3-7  
電話 03(814)5521

## 老年期の痴呆

### 飯塚礼二編

〔有斐閣選書〕 11000円

周囲を悩ます問題行動の背景に何があるのか、ど  
うすれば家族や社会が受け入れられるかを探る。

\*

原始・古代の製作技術を各素材ごとに多数の図版  
を使って解き明かす。著者多年にわたる研究成果。  
潮見浩著 〔有斐閣選書〕 11000円

## 図解技術の考古学

有斐閣

03-265-6811

東京・神田  
神保町2

## 大月書店

歴史と現在、そして未来を考える

# 日の丸・君が代 問題とは何か

山住正巳著 この旗と歌の歴史、負わされてきた役割を知り、「国旗」や「国家」にたいする考えを深め、歴史を逆転させない歯止めをつくるために、いまなさねばならないことは何か。46判・1300円

東京文京本郷2-11-9 / ☎03(813)4651

日本最大の定本的歴史百科。絶賛刊行中

# 国史大辞典

全15巻

## 第9巻(たかーて)

新刊 / 9月14日発売  
定価 一四、〇〇〇円

第1巻	一六、〇〇〇円	第5巻	一三、〇〇〇円
第2巻	一三、〇〇〇円	第6巻	一四、〇〇〇円
第3巻	一三、〇〇〇円	第7巻	一四、〇〇〇円
第4巻	一三、〇〇〇円	第8巻	一四、〇〇〇円

## 吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2-8 / 電話03-813-9151

## 御茶の水書房

あごら叢書

# 韓国社会の転換

—変革期の民衆世界—

滝沢秀樹著 / 定価2200円

盧大統領就任により、韓国民主化運動は新たな局面を迎えた。前進しつづける韓民族の歴史的可能性を提示

# 韓国民衆版画集

ウリ文化研究所編 / 定価2000円

湧き立つ根、踊る生! 民衆の歴史と生活を描く版画運動の成果を集成。

# 韓国現代社会叢書(全5巻)

安秉直・滝沢秀樹編

- ①分断民族の苦悩 ②韓国資本主義と民族運動 ③韓国民衆運動史論 ④民族文化運動の状況と論理 ⑤日本帝国主義と朝鮮民衆 各2500円

東京・千代田・九段北1-8-2 ☎03(265)5746

## 青木書店

# ペレストロイカは進む

●スターリン時代の遺産とのたたかい

稲子恒夫 ●著

定価一六〇〇円

転換期の渦中にあるソ連の最新の動きを的確に分析し、歴史の中に位置づける。

# モダニズムと ポストモダニズム

石井伸男・清 真人  
後藤道夫・古茂田宏

●戦後マルクス主義思想の軌跡—— 定価二五〇〇円

戦後思想史の中でマルクス主義はどんな位置にあつたか

東京神田神保町1-60 03-292-0481

## 社会思想社

対決が対話か? いま東欧を揺がす改革路線をめぐるせめぎ合いは、世界の建て直しの震源地となる。戒厳令布告後「かえって社会の自立的活動はひろがり……われわれは持ちこたえた。それはポーランド人の心のなかに(連帯)の理想と勝利への夢が息づいているからだ」(日本語版への序)ノーベル平和賞をもって讃えられたワレサからのメッセージ。四六判・定価二八〇〇円

■版權独占■

# ワレサ自伝

## 希望への道

筑紫哲也・水谷 驍=共訳

東京都文京区本郷3-25-13 ☎813-8105

## ユートピアと文明

輝く都市・虚無の都市

G. ラブージュ/巖谷國士, 他訳 美辞麗句に飾られてきたユートピアの虚像を縦横無尽の思考で打ち砕く ▶4200円

## 構造意味論

——方法の探究——

A. J. グレマス/田島宏, 鳥居正文訳 長らく刊行が待たれていた本書は、記号論の分野の記念碑的な著作 ▶6500円

## 男性の誕生

『黄金のろば』の深層

フォン・フランツ/松代洋一, 他訳 男性の精神的な成熟への課題として、〈内なる異性〉の重要性を説く ▶2500円

## 紀伊國屋書店

本店: 東京都新宿区新宿3 ☎03(354)0131  
出版部: 東京都世田谷区桜丘5 ☎03(439)0125

## 脳を超えて

S. グロフ/吉福伸逸/星川淳/菅靖彦訳 出生体験、個人性・時空の超越体験とその治癒力。深層・臨床心理学に驚くべき新局面を拓く衝撃の大作。4200円

## 人間と死

吉本隆明/竹田青嗣/芹沢俊介他 ハイデッガーやフーコー等、現代思想家の死の考え方をふまえ、脳死、ガン告知など最も現代的な死を模索。1400円

東京都千代田区外神田2-18-6 春秋社 ☎(03)255-9611 振替東京8-24861

誰にも書けなかった日本人  
謝新發 人種・国境をのりこえて、日本人の虚像と実像を赤裸々に描き出した体験の日本人観ノ1600円千250

棒馬考 イメージの読解  
E. コンブリッチ/二見史郎 他訳 大芸術から風刺漫画までを論じ、抽象と表現の問題を捉える。2800円千300

市民の精神医療 心の病いを理解するために  
岡上和雄・清水順三郎ほか 向精神薬とは、社会復帰病棟とは、など、臨床医からのアドヴァイス。2300円千300

セクシユアリティ 性のテロリズム  
S. ヒース/川口喬一監訳 性科学、精神分析、小説にセクシユアリティの表象の過程を探る。2500円千300

東京文京後楽2-23 勁草書房 振替東京5-175253

新刊

# 12 王と天皇

## 赤坂憲雄

王権の本質とは何か？ 天皇とは王の異伝なのだろうか？ 幼童天皇とはだれか？ 気鋭の思想家が果敢に挑戦する。重版出来・980円

●最新刊

14 古典落語の力 榎本滋民 980円

15 ヤルタ会談 倉田保雄 1200円  
戦後米ソ関係の舞台裏

東京神田 **筑摩書房** 小川町2

〈双書・20世紀紀行〉刊行開始！  
全巻に〔連載対談〕鶴見俊輔・長田弘

# シルクロード・ キャラバン

A・フィリップ 吉田・朝倉訳 革命前夜の中国シルクロードを映す。2300円

# シカゴ、シカゴ

N・オルグレン 中山容訳 埜埜の街シカゴへの稀有のラブソング。1800円

# ヘミングウェイ キューバの日々

N・フェンテス 宮下嶺夫訳 海と釣り創作——知られざる姿を明かすもう一つの伝記。序=マルケス。4900円

**晶文社** 東京都千代田区外神田2-1-12  
電話 (255) 4501

天野郁夫  
**大学——試練の時代**  
日本の大学の今日的課題を、四年制大学から短大や専修学校、大学院を含めて洗い出し、試練の時代の大学像を問い直す。1400円  
大内 力  
**冬ごもり**  
鋭い洞察と語り口で、大学・学生・読書論から政治経済、日本人論を展開する経済学の泰斗のエッセイ集。2800円  
石井和夫  
**大学出版の日々**  
学術出版一筋に歩んだ著者の折々の出版余瀉。人と本の出会い、学術出版の現実、出版文化の現在と未来等を綴る。2000円

## 東京大学出版会

113 東京都文京区本郷7 ☎03-811-8814

河合隼雄教授選暦記念論文集

# 臨床的知の探究(上・下)

山中康裕・斎藤久美子編 ユング派の大家河合隼雄教授の選暦を記念して、京大臨床心理学教室の全スタッフが自由なテーマでユニークな論文を執筆。

A5判 上下各2,500円

## 創元社

大阪市北区西天満1-4-2  
東京都新宿区山吹町334-11

非売品

昭和63年10月5日発行 年4回発行 第52号  
発行所 人文会 みすず書房内  
〒113 東京都文京区本郷5-32-21  
(113-91東京都文京区 本郷局私書函89号)

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印